ティエリー・ザルコンヌ著 / 東長 靖監修 / 遠藤ゆかり訳『スーフィー――イスラームの神秘主義者たち』(「知の再発見」双書 152) 創元社　2011 年　144 頁

本書は気鋭のイスラーム学者ザルコンヌ Thierry Zarcone がスーフィズムの入門書として著した *Le soufisme: Voie mystique de l'islam*, Gallimard, 2009 の翻訳である。本書の監修者である東長靖は著者とも親交があり、また現在もっとも活発にスーフィズムの研究を進めている人物であり、専門の翻訳者と協同して行った良質の概論書である。

イスラームという言葉は今や日常的に見たり聞いたりする言葉になっているが、近年は社会制度、政治的イデオロギーとしての面が強調されているようで、イスラームという宗教体系の広がり、深みの全体が調和のとれた形で提示されていないような印象をもつ。こういう状況のなかで、人間の内面にもっとも深く浸透していく神秘主義の営みについての書物が紹介されることはイスラームの総体の理解のために歓迎すべきことである。

イスラームの神秘主義的側面については日本でも細いながらもそれなりに長い研究の歴史はあるが、一般的な単行書として読めるものは決して多くない。日本語で読めるスーフィズムの入門書としてはこれまで、ニコルソン『イスラムの神秘主義』くらいしかなく、この書は古典としての価値はまだあると思うが、近年の研究成果は当然反映していないので、いかにも古い。ニコルソンの著作の後も英語などではいくつかのそれぞれ特徴ある入門・概説書が出ているが、残念ながら日本語では紹介されていない。本書は現在までの研究成果を組み入れており、最新の知見を提供している点が先ず特筆されよう。

本書は第一章　初期のイスラーム神秘主義者たち、第二章　教団、第三章　マグリブから中国・インドネシアまで、の三章と資料編としてスーフィーの語った言葉の紹介などからなる。日本語版では資料編に新たに簡潔な年表が付加され、参考文献は日本語文献のリストに替えられている。20 世紀半ばまでの研究では主に初期のスーフィーの実践や思想が注目されており、本書の第一章がほぼそれにあたる。ここでは初期のスーフィーたちからイスラーム神秘主義の最大の思想家であるイブン・アラビーまでのおおまかな見取り図が描かれる。マラーマティーヤとスーフィーの流れの関係など近年の成果も取り入れている。また、スーフィズムをスンナ派とシーア派の間に位置づけるという見方（23 ページ）も、シーア派研究の盛行の結果出てきた言い方であり、これはひとつの新しい説明の仕方であろう。ただ、シーア派という言葉自体がザーヒル、バーティンの両面を含む名辞であり、非常におおざっぱな言い方でいえばこのような図式を立てられるとしても、厳密に概念規定をしていくと意味不明の図式になるであろう。従来のスーフィズムの概説で語られていたものはほぼこの第一章にまとめられており、限られたページのなかに手際よく提出されている。ただあまりにも簡潔にまとめているので、もうすこし丁寧な説明もほしくなる。

第二章ではスーフィー教団の姿を描き出す。13 世紀以降、指導者を中心にした小さな共同体を作っていたスーフィーたちは徐々に大きな教団〔タリーカ〕を形成し、それぞれが特有の儀礼や思想を発展させていく。リファーイー、シャーズィリー、ナクシュバンディーその他の主要な教団の特有の考え方や儀礼などの特徴を述べ、最後には特に女性とスーフィズムの関わり、日本でも盛んに研究されている聖者信仰について触れている。簡潔であるが、それぞれの教団の儀礼についての具体的な記述は、その背後に多くの研究成果が潜んでいるのを感じ取るべきであろう。なお、vénération（原書 p. 67）を崇拝（本書 71 ページ）と訳しているが、聖者についてのものであるので、崇敬という語の方が適切であろう。

第三章ではスーフィーが遠い昔の特異な信仰者ではなく、現在にもつながる生きた宗教活動をする人々であり、スーフィズムもイスラームという文化のなかのひとつの様態にとどまるのではなく、他の宗教や他の文化とも接点をもつおおきな広がりをもつものであることを述べている。我々はなじみのない宗教（であれ何であれ）については限られた知識を増幅させて考えがちである。イスラームについても一神教ということから排他性を思い、酒も飲まず一ヶ月も断食をするという戒律からつきあいきれない堅物のイメージを抱き、ジハードの教義を聞いてとんでもない暴力集団であると感じたりする。

たとえば地中海世界ではイスラームはユダヤ教やキリスト教とさまざまな形で触れあっていた。その歴史のなかには十字軍、ゲットーへのユダヤ人隔離、イスラエルの建国など互いが衝突するような事態もあり、我々はそういった事象を大写しにする眼鏡を通してこの地域を見ているので常に対立抗争を続けていると思ってしまう。しかし、本書の記述にあるようにスーフィーたちとカトリックや正教の聖職者たちとの交流、ユダヤ教とスーフィーとの交流など、現実の宗教者の行動は我々が安易に思い浮かべる対立抗争だけのものではない。イスラームというと一神教としての排他性ばかりが強調されるが、中央アジアでのシャーマンの伝統の持続、インドにおけるスーフィーとヒンドゥー教徒との交流、中国での儒教の伝統の摂取など、実際の宗教のあり方は、われわれが思い描くような単純なものではない。本書では欧米の近現代の神秘主義的思想家たちへの影響まで触れており、この書はスーフィズムの単に地理的、歴史的な広がりを記述するだけではなく、イスラームの領域を超えるようなまなざしすらスーフィーはもっていることを知らしめてくれる。

資料編は本文のなかでは十分に触れていないスーフィーたち自身の言葉や、彼らの思索や実践についての同時代人の描写などを紹介している。この翻訳書では出典などは省略されているが、原書では出典も記されており、トルコ語の文献については著者自身の翻訳が多いが、そのほか、アラビア語やペルシア語などの言葉の文献については既存のフランス語の翻訳から抜粋引用されたものが多い。スーフィズムの原典をフランス語を母国語とする人たちは自由にこれだけのものを読めるのだと思うと（英語の場合も同様）、何重にも手枷足枷をはめられて研究をしている日本の研究者があわれにも、また英雄的にも思われてくる。日本でもイスラームの研究はこの『イスラーム世界研究』のような専門誌ができるくらいには発展しているが、個々の研究者は論文書きに専念するだけではなく、重要な原典をきちんとした日本語にして紹介するということにもっと力を注ぐべきである。すくなくとも自分が利用した重要な原典は翻訳のかたちで後世の学徒のために残すように努力してほしい。論文であれば原典の意味不通の箇所は無視しても形は整う。だが、翻訳の場合は分からない箇所は分からないと言わなければならない。それだけ翻訳の方が困難であるといえるだろう。

本シリーズの特徴であろうが、本書はたくさんの図版（写本、細密画、写真、地図など。しかも多くのものはカラー）を含み、それぞれの図版についてもきちんとした解説を付して、やや簡潔過ぎる本文を補っている。ただ紙面の都合で時に説明を省略しているところ（たとえば、53、55ページ）もあるが、これはやむを得ないであろう。なかには始めて目にするような画像もあり、もっと詳細な説明をしてくれればありがたいと思ったりもする。20ページのカランダルの絵ではいろいろ持ち物などの象徴的意味が説明されているが、イスラームでは穢れたものとして嫌悪されることの多い犬をこの人物は連れており、これはどういう意味をもっているのだろうか。マラーマティーヤ的意味合いであろうか。図版を見ながら本文を読むことで謎解きも楽しめるかも

しれない。読みやすく、情報量も多く、視覚的にも楽しい入門書になっているといえるだろう。

（鎌田 繁　東京大学東洋文化研究所）

山根聡『4億の少数派――南アジアのイスラーム』（イスラームを知る8）山川出版社　2011年　114頁

「イスラームを知る」シリーズ全12巻の第8巻である。いずれの巻も、グローバル化したイスラームが世界各地でどのような実態をもって展開しているのか、コンパクトに、しかし非常に充実した内容が盛り込まれ、近年のわが国のイスラーム研究の深化、多角化を幅広い読者に教えてくれる。その中で、本書は、インド、パキスタン、バングラデシュを中心に南アジアのムスリムを扱っている。この三か国に住むムスリムのおおよその人口が題名の4億人である。読者はまずこの4億という途方もない数と、「少数派」という組み合わせに気を引かれるにちがいない。

その意味を説明するために、著者はまず南アジアのムスリムの「二重の周縁性」を指摘する。すなわち、ヒンドゥー教徒が多数派を占めるインド世界におけるイスラームの周縁性と、アラブに中心をもつイスラーム世界における南アジアの周縁性である。4億人いても、インド・ムスリムはいつも少数派の扱いを受けてきた。さらにこのことは、わが国においては、ウルドゥー語やベンガーリー語、パンジャービー語といった南アジア諸言語による文献を利用できる研究者が多くないこととあわせ、南アジアのイスラーム研究の蓄積が限定的であったことの理由ともなってきた。にもかかわらず、わが国の南アジア・イスラーム研究は少数ながら質の高い内容をもっていたと著者は指摘する。

今日、テロやターリバーン、さまざまな紛争といった時事的な動向によって南アジアが注目されるが、そうしたことを含め、南アジアにおけるイスラーム的要素の影響の大きさを、あらためて捉え直すことで、南アジア研究全体を深化させ多角化することができる。冒頭でこの簡潔ながら本質的な問題意識が示されることによって、読者は南アジアのイスラーム世界の長い歴史の意味の大きさを実感するだろう。

本論の章立ては以下のようである。

第1章　インド・イスラーム文化
第2章　西欧的近代との出会い
第3章　イスラームの政治運動化
第4章　イスラームと国家の関係
第5章　世界情勢と南アジアのイスラーム

第1章では、南アジアに初めてイスラームがもたらされた8世紀から、19世紀なかばにムガル帝国が滅亡に至る約1100年の物語が紡がれる。インド世界にもたらされた一つの文化としてのイスラームが、ヒンドゥー的な信仰やサンスクリットの要素を取り込み、さらにペルシャやトルコの文芸的要素と融合して新しい文化を形成していく。スーフィーやバクティー、遍歴する大道芸人「バウル」、ムスリム商人層、そしてムガル皇帝と貴族たち、いずれもが文化を育て、継承する担い